

# 資本主義 現在・過去・未来

— 『マルクス経済学方法論批判』をめぐって<sup>1</sup> —

小幡道昭

2013年4月27日

<sup>1</sup>第475回 独占研究会

1/30

## 現在

### 研究の始点

- 1 例によって、かなり勝手な「グローバリズム」論だが
- 2 インペリアリズムとグローバリズムが関心事
- 3 「発展段階論」の<再構成>
- 4 「ネオリベラリズム」と「グローバリズム」のギャップ問題(第2章)
- 5 以前から感じてきた、純粋資本主義論との微妙なズレ(第7章)
- 6 原理論の<再構築>
- 7 方法論の再検討へ: 変容論的アプローチ

3/30

### グローバリズムと原理論

- 1 グローバリズムが出発点だった。気がつけば....
- 2 どこか見なれぬ光景が周りに広がっていた。

	(再)収斂説	再多様化説
不在説		
断絶説		

- グローバリズム = ネオリベラリズム説
- ネオリベラリズム主導説: アメリカナイゼーション
- グローバリズム底流説: 新興経済圏 エマージング・エコノミーの主導性
- 資本主義の歴史全体の「底流」だと誤解しないでほしい。グローバルヒストリーではない。

4/30

### 発展段階論の基本問題

- 1 生成・発展・没落という枠組では捉えられない世界にさまよいこんでしまった....
- 2 「没落」というのが、「死滅」「崩壊」ではなく「爛熟」maturedの意味だとしても....
- 3 資本主義の「起源」から考えてみる必要がある。
- 4 現代のグローバリズムの理解に直結する問題として....
- 5 「起源の二重性」(『方法論批判』209頁以下)
- 6 中国経済について(212頁): 複線的多重起源説への拡張か

5/30

## 過去

### 多重起源説の「起源」

- 「重商主義段階」という暗黒大陸: その二つの顔
  - 1 資本主義の「起源」という顔
  - 2 資本主義の「段階」(生成段階)という顔
- 「重商主義段階」に対する加藤栄一説と桜井毅説の検討
- 「機械化」の理念化: 「自由主義段階」
- 奇妙な「輸入説»: 「帝国主義段階」
- イギリスの「重商主義段階」とドイツの「帝国主義段階」の同源性
- 単一起源説 → 多重起源説
- 「グローバリズム」という新しい「プレート」の隆起

7/30

### 「重商主義段階」の出自

- 『経済学方法論』の論理
  - 1 段階論の原問題: 一九世紀末の後発諸国の資本主義化 → 帝国主義「段階」
  - 2 純化傾向の逆転 → 自由主義段階
  - 3 純粋資本主義の想定: 段階論を想定した原理論の再純化
  - 4 原問題から直接「重商主義段階」はでてこない。
- 『経済政策論』の論理
  - 1 帝国主義を「政策」として捉える → 自由主義政策
  - 2 経済政策として自由主義に対立する → 重商主義的政策
  - 3 支配的資本が政策を規定するという教義<sup>ドグマ</sup>
  - 4 → 産業資本の支配 = 自由主義段階に先行する商人資本の支配 = 重商主義段階
  - 5 「発展」「没落」に先だつ「生成」という発想 → 重商主義段階

8/30

「資本家的生産関係の形成、確立は、しかしそういう暴力的変革によって直ちに完成するものではない。「農業生産者からの、農民からの土地収奪」を「全過程の基礎」とする、直接の生産者と生産手段との分離の過程は、従来、農業と直接に結合せられていた、特に羊毛工業の工業としての独立化として具体的に実現せられる。この基礎をえてはじめて暴力的変革も資本家階級形成の槓杆となるわけである。」宇野弘蔵『経済政策論』1971年 47頁

### 資本主義の「起源」と生成「段階」

- 1 労働力商品化を資本主義の本質と捉え、「土地囲い込み」に重点をおく。
- 2 生産手段としての土地と労働力の分離 → プロレタリアートの形成が基本線。
- 3 工業化（産業化） industrialisation を資本主義化と同じ意味に解する立場
- 4 マニュファクチュア（「工場制手工業」） → 「機械制大工業」
- 5 しかし、土地囲い込み → プロレタリアート → マニュファクチュア というかたちにはならない。
- 6 宇野弘蔵はマニュファクチュアの自立性を疑問視し、商人資本による「家内制手工業」 → 産業資本による「機械制大工業」という発展を考えた。
- 7 ところが、プロレタリアートの形成 → マニュファクチュアによる吸収も、ましてやプロレタリアートの形成 → 「家内制手工業」による吸収もあり得ない。
- 8 プロレタリアートの形成 → 「機械制大工業」による吸収しかない。とすると.....

### 不連続性

- 1 羊毛工業から綿工業へという発展はない。
- 2 エンクロージャーで形成されたプロレタリアートが羊毛工業に吸収されたことはない（都市に流れ込んで雑業層を形成）
- 3 羊毛工業で機械制大工業のベースになる不熟練労働者が形成されたことはない。
- 4 羊毛工業の原料は基本的にイングランド内部で生産される。綿工業の原料はすべて輸入。
- 5 綿工業は孤立した工場として立地。Cromford, New Lanark
- 6 綿工業も同質な単純労働（婦人・児童労働）だけの世界ではない。

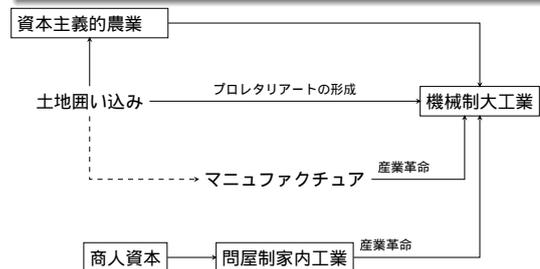
### 自由主義段階：「機械化」論

機械の出現は、その意味で商人資本による直接の生産者と生産手段との分離の過程を完成すると同時に商人資本の支配を終結せしめるものとして歴史的に画期的なるものであった。したがってそれは、すでに羊毛工業に対する商人資本の支配を通して実現せられてきた農業と工業との分離を、綿工業の機械化として完成したことに意義があるのである。それは単に機械が発明されたとか、何らかの産業部門に採用されたとかというのではない。直接の生産者と生産手段との分離の永い間の過程の内に大衆的に造出されてきた無産労働者を真に無産者化するものとして革命的なのである。手工業を基礎とするマニュファクチュアにおいては、その生産方法の発展は労働者の労働力そのものを出发点とするのであって、いかに分業的に部分作業化しても熟練労働から解放されるわけにはゆかなかった。ところが機械的大工業は、労働者の作業そのものを個々の労働者から解放する労働手段の機械化を出发点とするものであって、労働者からいわばその腕前も奪って真に無産者化してゆくのである。（宇野〔1971〕78-9頁）

- 「資本家的生産関係の形成、確立」の「基礎」は、マルクスが「全過程の基礎」だと主張する「農業生産者からの、農民からの土地収奪」ではなく、「羊毛工業の工業としての独立化」が基本線
- 羊毛工業の工業としての独立化による重商主義段階の特徴づけは、工業の農業からの分離を重視した結果
- 商人資本による小生産者の支配は羊毛工業に従事する小生産者の生産手段の喪失
- 羊毛工業における小生産者の漸次的解体は、マルクスが「全過程の基礎」だとして重視した「農民からの土地収奪」によるプロレタリアート化とは別系列

### 起源の多義性

「起源」の問題は、今日の新興国における製造業の雇用形態、経営様式をみながら、ふり返ってみる必要がある。



### プレートの交替

- 「農業革命」(Marx〔1867〕S.751) → 「産業革命」(Marx〔1867〕S.392)、農業資本主義 → 綿工業という発展経路は、商業革命に端を発する世界商業 → 羊毛工業という一連の流れを、同じイギリスの地で突き破るかたちで表出
- このような衰退と興隆の葛藤、連続と断絶の交錯の過程は、一つながりの生成・発展・没落の「段階」を逸脱する現象
- 重商主義段階とよばれてきたものは、大陸で生成・発展した古いかたちの資本主義がイギリスに迫りだし没落するなかで、新たなかたちの資本主義の台頭が進んだ
- この最後の局面だけを取りだして「重商主義」というラベルをはること自体に無理
- 「段階」とよぶことも不適切
- 資本主義の「プレート」の交替とよぶのが相応しい、不連続でダイナミックな地殻変動

### 自由主義段階：極相化

- 宇野の場合、機械制大工業論の純粋化、理念化が進む。
- 完成した自動化工場と、大量の単純労働者の吸収と反発という矛盾した性格。
- 景気循環論の理念化。
- 資本主義は特定の生産技術でしか、成長できないのか。最適な生産体制というものがあるのか。農業不適合説。
- 自由主義段階を理念化するために、原理論の課題の負荷をかけた。さまざまな労働組織に妥容する分岐構造の抽象化・理論化が停滞

当時の資本主義化がまず第一に衣料品工業、とくに機械的綿工業の輸入に始まることはいうまでもない。しかし単にそれだけではなかった。ドイツの資本主義化は、三十年代の後半から始まる鉄道事業の発展を伴って行われた。また四十年代まではなお例外的にしか見られなかった産業における株式会社形式が、五、六十年代になると急速に普及してきた。後進国としてのドイツにとっては綿工業にしても株式会社形式による輸入を便利としたことはいうまでもないが、鉄道事業とともに発展する鉄、石炭等の重工業をも同時に資本主義的に比較的大規模に経営するものとして、それはむしろ当然のことであった。銀行もまたこういう資本主義の発展に対応して早くから株式会社の設立に関係するいわゆる大陸型の産業銀行的性格をもたざるをえなかったのである。(宇野(1971) 150頁)

- 宇野はドイツの資本主義化は「機械化された衣料品工業を輸入」するかたちをとったというのであるが、いうまでもなく、機械は輸入できても資本・賃労働関係は輸入できない。
- 「輸入」という表現によって、ドイツにおける労働力商品の「創出」の側面が覆いかくされた
- ドイツにはドイツなりの資本主義の「起源」がある
- 「輸入」というかたちでドイツの資本主義化を特徴づけたために、ドイツに固有の「起源」が何処かに「輸出」された観
- 機械的大工業の「輸入」説が結びつくことで、資本主義は世界史上ただ一回イギリスにおいて発生し、それが後発諸国に拡大していったという、資本主義の単一起源説が形づくられる

単一起源説

- 1 資本主義はイギリスで発生し、それが全世界に波及したとみる立場。
- 2 労働力商品化を資本主義の本質と捉え、「土地囲い込み」に重点をおく。
- 3 生産手段としての土地と労働力の分離→プロレタリアートの形成が基本線。
- 4 工業化(産業化) industrialisation を資本主義化と同じ意味に解する立場
- 5 マニュファクチュア(「工場制手工業」)→「機械制大工業」
- 6 土地囲い込み→プロレタリアート→マニュファクチュアというかたちにはならない。
- 7 宇野弘蔵はマニュファクチュアの自立性を疑問視し、商人資本による「家内制手工業」→産業資本による「機械制大工業」という発展を考えた。
- 8 しかし、プロレタリアートの形成→マニュファクチュアによる吸収も、ましてやプロレタリアートの形成→「家内制手工業」による吸収もあり得ない。
- 9 プロレタリアートの形成→「機械制大工業」による吸収しかない。とすると.....

生成・発展説批判

重商主義	生成期の資本主義	商人資本としてのイギリス羊毛工業
自由主義	成長期の資本主義	産業資本としてのイギリス綿工業
帝国主義	爛熟期の資本主義	金融資本の諸相(独・英・米)

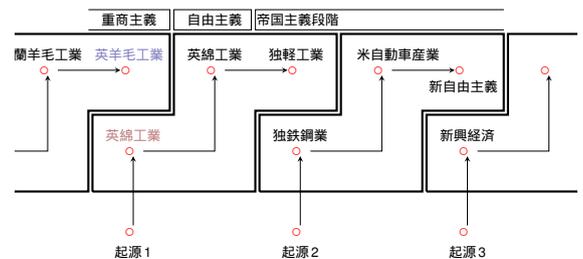
問題点

- 1 重商主義段階：生成→自由主義段階：発展 という連続の関係にはない。
- 2 イギリス国内で、羊毛工業の衰退と、綿工業の勃興があった。

折り重なる構造

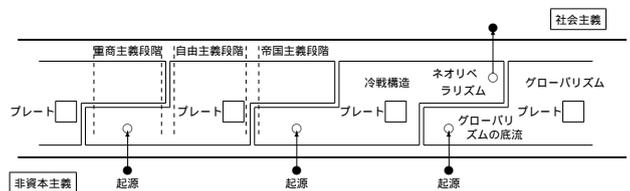
- イギリスの「重商主義段階」にもドイツの資本主義化とよく似た構造が潜んでいる。
- イギリス羊毛工業も、ある意味では、先発地域であるオランダやフランドル地方から「輸入」された一面をもつ。
- ドイツ衣料品工業は、イギリス羊毛工業と論理上、同じ位相にたつ。
- イギリス資本主義が、羊毛工業ではなく、それと競合する綿工業を基軸に確立されたように、
- ドイツ資本主義も「輸入」された「衣料品工業」ではなく、鉄鋼業のような新たな産業をベースに進んだ。
- ドイツの資本主義化は、イギリスの重商主義段階から自由主義段階へ「発展」と類似した相をもち、ドイツ帝国主義はイギリス重商主義にオーバーラップしてくる。
- 重商主義段階を資本主義の生成期、帝国主義段階を爛熟期として対照することに、そもそも無理があった。

多重起源説



未来

資本主義の発展段階



- 1 新たな資本主義化の波：起源3：グローバリズム
- 2 工業生産技術の優位が崩れる：脱工業化 deindustrialisation
- 3 資本主義的な雇用のかたちが維持できない：雇用問題
- 4 ニューディール型の政府による雇用・ケインズ主義：財政危機
- 5 金融化によって雇用は維持できるか：金融危機
- 6 成長の追求には自然環境の限界がある：環境問題
- 7 知的活動の商品化：所有問題

3つの問題について、経済原論をふり返ってみる。

- 労働市場は、その背後に生活過程という開口部をかかえている。
- これは、グローバリズムのもとで深刻化する先進諸国における雇用問題を考えるカギ。
- 新興諸国との競争は、さらなる生産力の上昇を先進諸国に迫る。生産力が高まれば、一定の資本量が吸収する労働量は相対的に減少する。
- このもとで雇用を維持しようとするれば、それを上まわるペースで生産規模を拡大するほかない。
- しかし、自然環境の制約を考えてみても、このような拡大には限度があり、産業予備軍の増大は避けられない。
- こうした状況の下で雇用を維持しようとするれば、教育や文化の分野に資本の活動の場を創出し、直接的な対人サービスの商業化が不可避。
- それは、効率化が目的ではない生活過程の隅々にまで、形式的な合理化を求めることになる。

- 自然環境を原理的に捉える手がかりは、再生産と本源的自然力
- 再生産されない自然力には、コストの回収という考え方が通用しない。
- 資本は、自然力に対しては「買って売る」のではなく、一方的に「借りる」というかたちで対処
- 再生産ベースで活動する産業資本は、自然環境との物質代謝を再生産という制御可能な領域に移そうとする傾向 [恒久的土地改良]
- だが、この制御可能性は見かけのもの
- 私的な欲望充足と資本の利潤追求という個別的動機を原動力に活性化させる資本主義は、コントロールの輪を際限なく広げてゆく。
- 先進諸国が新興諸国と同じ成長競争に引き込まれるかぎり、環境問題のリスクは高まる。
- 環境問題の深刻化は、何のために消費するのかという、資本主義には厄介な目的自体の価値評価を迫る。

- グローバリズムのもとで、先進諸国における労働の中心はモノの生産から知識・情報の獲得にシフトしつつある。
- こうした対象ははたして資本主義による処理に馴染むかどうか。
- ポイントは私的所有と発見
- これまで独立したモノとは考えられてこなかった情報や知識が、次々にモノと見なされ、市場に取りこまれてゆく。(モノの三層構造、参照)
- 知識や情報に対して私的所有を正当化するイデオロギーは「発見に基づく所有」
- 資本は、同種のモノが大量に生産・消費されるフローを、安く買って高く売るという姿態変換に組み込む処理方式。
- しかし、発見については、コスト回収の原理が適用しにくい。
- 知的活動の領域への資本の浸透は、これまで漠然と「共有」の理念で支えられてきた社会的規範に軋轢を生み出す。
- 人間社会のどの領域を、いかなるかたちで営利活動に委ねるべきか、資本主義がクールに避けてきたイデオロギー・コンフリクトが表面化。

- 不適応としての帝国主義段階論：不純化
- 「熟成」について(『方法論批判』55頁以下参照)
- 資本主義の過適応
  - 1 柔軟性
  - 2 分解作用
  - 3 浸透力
- 「先進資本主義」ならぬ「先進社会主義」(77頁)

- 20世紀の社会主義：革命と社会主義
  - 1 フランス革命とロシア革命
  - 2 マルクス・レーニン主義 周辺革命 世界同時革命
  - 3 フィリピン革命・アラブの春
- ソビエト・ロシアの瓦解と社会主義の多様性の復活
- 社会主義と呼ぼうと呼ぶまいと...
- それでも社会は変わってゆく。